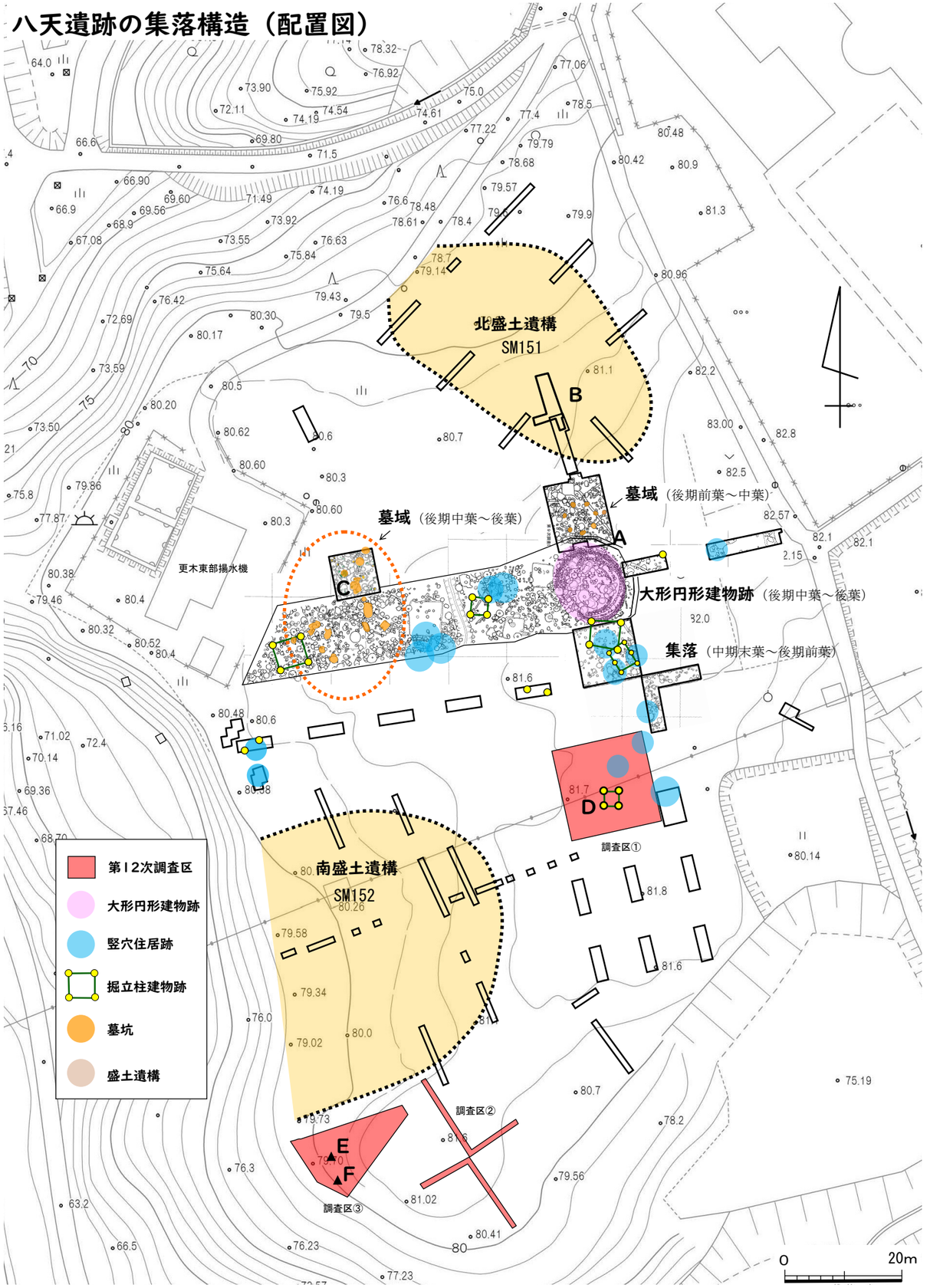



# 八天遺跡第12次調査の概要

## ○調査の成果

第12次調査は、①台地南部の高台、②台地南西部の壇状地形、③その隣接地の未指定地の3か所について、遺構分布の確認を目的として実施しました。その結果、縄文時代の竪穴住居跡1棟、炉跡3基、大型柱穴で構成される掘立柱建物跡1棟、土坑（貯蔵穴・柱穴・落とし穴・墓穴）約500基を確認しました。また、古代（平安時代）の竪穴住居跡3棟、近世以降の墓地1か所を確認しました。

特筆すべき成果として、大形円形建物跡出現期である後期中葉の大型柱穴から構成される掘立柱建物跡を新たに1棟確認したことが挙げられます。

## ○集落構造との関係性

6年間の調査で、盛土遺構が台地の南北に存在し、それらに挟まれるように数多くの遺構が分布することが明らかになりました。盛土遺構は度重なる「もの送り」、あるいは谷状地形の埋め立て（造成）の結果、形成されたと考えられます。

中期末葉～後期初頭（約4,500～4,200年前）に最初の本格的な集落が営まれます。複式炉を備えた竪穴住居跡と貯蔵穴が数多く分布します。今回の調査でも竪穴住居跡1棟、炉跡3基が見つかっています。

後期前葉（約4,200～4,000年前）になると、掘立柱建物が出現します。柱穴が大きく深いことから、大規模な建物が何棟か存在したとみられ、この時期に集落構造が変化したと考えられます。

後期中葉（約4,000～3,600年前）には本遺跡を象徴する大形円形建物が出現します。今回の調査ではこの時期の掘立柱建物跡が新たに1棟確認されました。大形の建物が台地上の広範囲に存在したことが判明し、集落の構造を考える上で貴重な発見となりました。

後期後葉（約3,600～3,200年前）には大形円形建物が存続するとともに、台地西側に墓域が営まれます。これまでの調査で配石遺構や焼けた人骨を集めた墓坑等が確認され、耳・鼻・口形土製品などが出土しています。これらは、死者に対する供物あるいは儀式の結果として副葬されたものと考えられます。

大形円形建物跡（昭和51年）　A

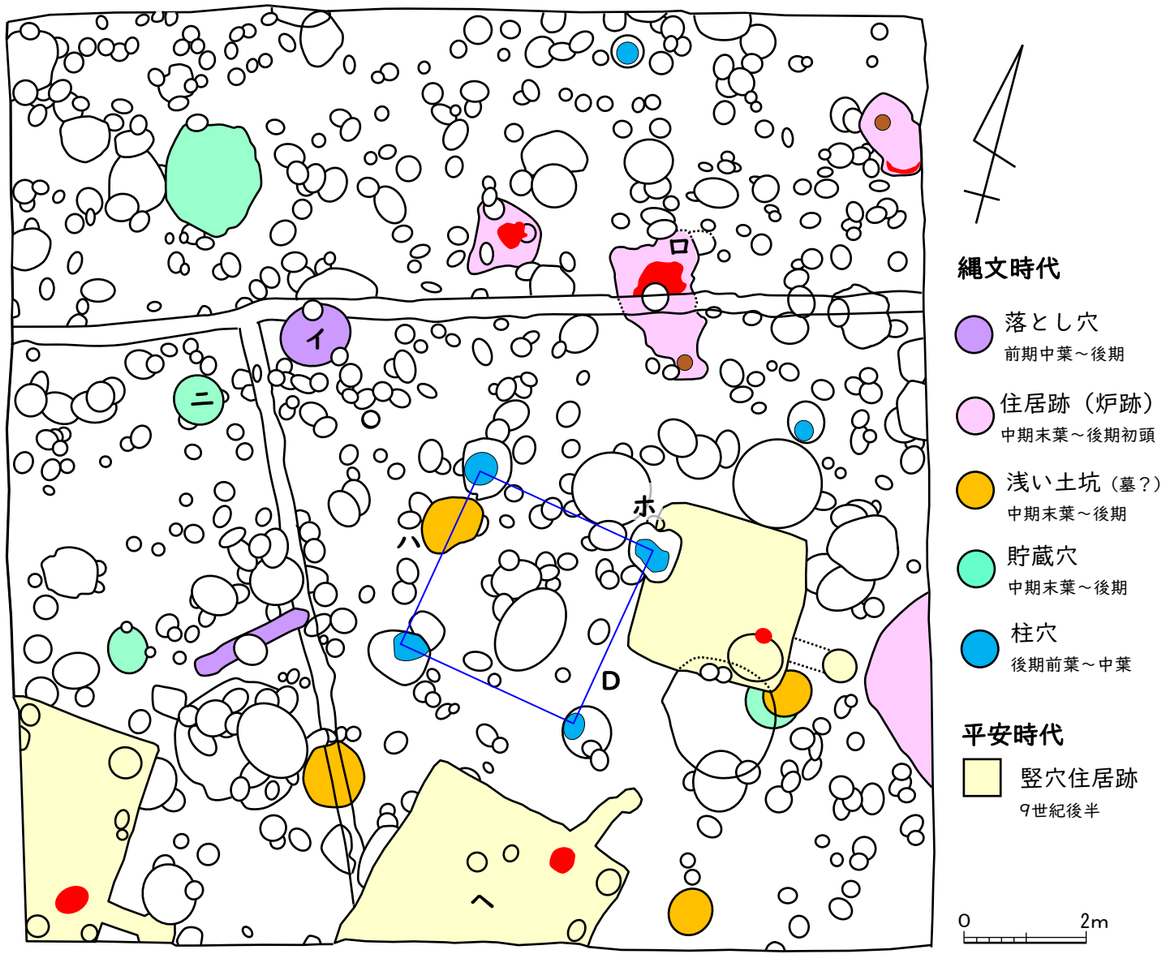
北盛土遺構（令和３年）　B

配石遺構（令和３年）　C

令和７年11月１日（土）

北上市教育委員会教育部文化財課

## 調査区①遺構配置図



落とし穴（縄文時代前期中葉）

複式炉（縄文時代中期末葉～後期初頭）

浅い土坑（縄文時代中期末葉～後期初頭）

貯蔵穴（縄文時代後期初頭）

調査区①では縄文時代前期中葉～後期中葉の遺構が重なり合って見つかりました。当時台地の北側と南側には谷があり、それらに挟まれた平坦面に縄文人が生活していたことが分かっています。

落とし穴の一基では6,000年前に十和田火山から降下した火山灰が確認されました。

複式炉（竪穴住居の囲炉裏）や貯蔵穴など、中期末葉～後期初頭の集落に関係する遺構も見つかっています。

## 掘立柱建物跡（縄文時代後期中葉：4,000～3,600年前）

大型柱穴の断面（中央の黒土が柱痕跡）

掘立柱建物跡（人が立っている場所が柱穴）

八天遺跡では規模の大きい柱穴が多く見つかっています。これまで見つかった柱穴には、①直径50～60㎝の柱痕跡が明瞭に認められる、②柱痕跡外側の埋め戻し土には大量の火山灰粒（パミス）が混ざっている、③直径・深さともに１ｍ以上の大形のものが多いという３つの特徴があることが分かっています。このような特徴を有する柱穴で構成される掘立柱建物跡は、縄文時代後期前葉からつくられ始めました。

今年の調査では、この大型柱穴が４基確認され、整然と配置されていることから一棟の建物跡を構成することが判明しました。柱間（はしらま）は3.1×3.1ｍ、深さは約１～1.2ｍです。縄文時代後期中葉の遺物が出土しており、大形円形建物跡が建てられた時期と一致しています。主柱穴は大形円形建物よりもやや小さいものの大規模であり、何らかの関係性を有する建物であったと考えられます。

## 竪穴住居跡（９世紀後半）

竪穴住居跡（人が座っている場所がカマド）

鉄製鋤先

台地の南側では古代の竪穴住居跡が多く見つかっています。今年の調査では、八天遺跡で初めて鉄製の「鋤先（すきさき）」が出土しました。U字に抉（えぐ）れた部分のV字溝に木製の柄（え）をはめ込んで使用したものと考えられます。

## 調査区③で確認された遺構

複数の墓（近世以降）

寛永通宝

落とし穴（縄文時代前期中葉）

調査区③は遺構はあまり多く見つかりませんでした。縄文時代の遺構は落とし穴が確認されましたが、調査区①のものと異なり火山灰は堆積していませんでした。また、小型方形の土坑が多数確認され、内部から骨片が見つかりました。表土から寛永通宝（六文銭か）、遺構内から方形や円形の鉄釘が出土していることから、近世以降の墓と考えられます。